

きぶのやま

NO.88
月刊

第三輯 寺院篇 傳十五号
昭和四十年十月一日発行 (非売品)
岡山県都立郡吉備町東町一五五字垣方呼電四三七番
吉備 魏老 協会

○法正山信城寺 (その二)

海野氏墓標 (板倉氏家臣) (第七囀人物篇海野燿青参照)

一 常鳴院三申日法居士 明治九丙子年五月十九日享年七十七 海野幸雄 墓
法幸院妙淨日喝大姉 明治十八乙酉年二月廿二日享年七十二 同人妻 墓

二 天明院妙岸日貞大姉 明治廿五壬辰年二月廿二日同人妻現名美孫存廿一才(花妻)
慈厚院顯性日恒居士 大正十一年十二月十一日享年五十八正七位勲八等海野恒三郎
慈雲院妙性日寛大姉 昭和二十二年九月八日没行年七十六才同人妻元登 (台妻)

一 妙法剛心院義勇日猛 靈 備後福山 俗名鈴木岡右衛門重直文元五度申(一日不明)
無縁墓のなかに高さ三尺余、一尺二寸角の石碑がある。銘に
「常願目永代日牌入 南無妙法蓮華經 日量(花押)」
右面に近藤家先祖累代の法名を刻んである。二
左面に蓮達院 妙香 近藤佐左エ門。
此は近藤佐左エ門が先祖供養のために建てたものであるが建碑の年号がない。近藤家は
平野村の庄屋と勤めた近藤吉兵衛の先祖にして數十基の墓標が了性寺と当山の二ヶ所に
ある。日量は当山七在少住取にレ、宝曆十一年四月廿一日に示寂してゐるので寛延、
宝曆の頃の建碑であろう。

△宮田氏墓標 (板倉氏家臣)

一 蓮池院英常信士 元文四己未歲六月廿二日 俗名宮田定之進武英 墓
二 壽量院清真日深居士 寛保戊戌年四月上浣七日 宮田政右衛門持敏
三 清老院妙祐日長大姉 寶曆四年十一月廿三日 (持敏の妻 梓在あり)
三 清老院妙長日輝大姉 寛保三年七月廿九日 宮田文七 妻
經王院興信疑居士 一政年不詳 法名は日蓮宗派のものはない)
清寿院妙典日榮大姉 天明七丁未年二月廿四日

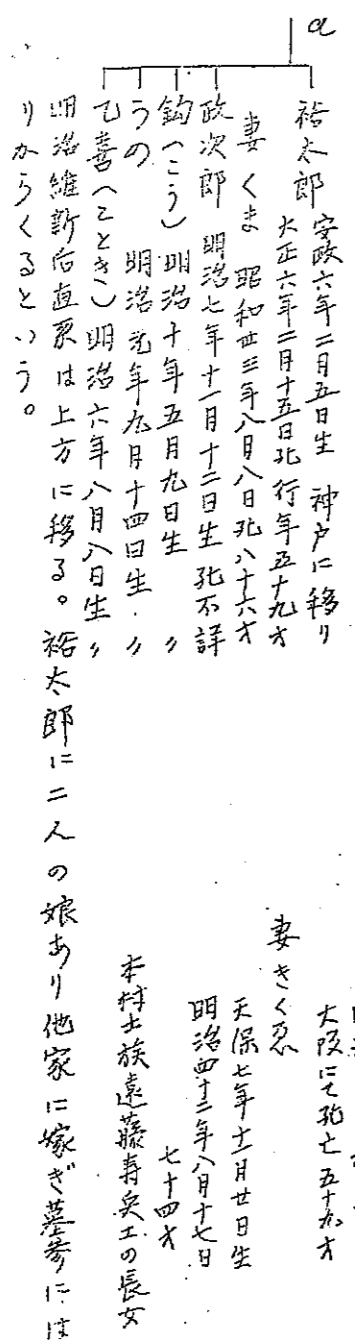
四 唯是院義信士 安永八己亥年六月廿四日卒 丑名宮田喜多治 墓
五 眞淨院宗受日持居士 萬延元庚申歲十月廿八日卒 行年七十三才 宮田政右衛門信敏
淨寿院妙真日受大姉 明治二己巳歲正月十四日卒 行年七十六才 俗名 勢以

六 慈法院蓮登日堂居士 明治廿一年六月十二日 宮田 寛 行年五十九才
七 蓮成院敏雄日健居士 大正六年二月十五日 土族 裕名 裕太郎 行年五十九才
速得院妙成日雄大姉 昭和三十三年八月八日 俗名 宮田クマ 行年八十六才
このほか大塚山に一墓ある。

義見院常遠日宣居士 文化九年申十二月四日 宮田新八郎
宣示院妙義日常大姉

当山の墓石は平堂の裏にあり丸耀星の家紋を附けてゐる。宮田家は板倉氏家臣帳に録十六
年に結人目附高五十石、宮田頼兵衛、享保十四年家臣帳に筆記家老宮田政右衛門、明治二
年家臣帳に先年物頭高五十石宮田 寛とある。

宮田頼兵衛 武英 一 持敏 文七 一 新八郎 信敏 寛
政右門 政右門 天保元年四月十二日生 明治廿一年六月十一日 大段に北七五十九才



△津久井氏墓標 (板倉氏家臣)

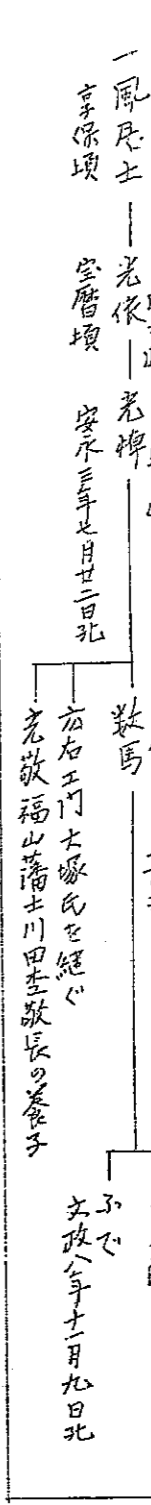
津久井家先祖累代墓 昭和六年六月 庭瀬藩士津久井善大夫孫善夫建也
明治二年家臣帳に御印入高二百石、津久井助右衛門とあり江戸詰の役人にして、いま子孫
は倉敷市水島あたりに住してゐるといふ。墓考には歲次庄村夫即の石原八九次が來てゐる。

木多氏墓標 (板倉氏家臣)

一 妙法善有院宗春日照居士 明治三庚午年三月廿二日 享年四十八 本多 肇源元恒墓
淨善院妙照日善大姉 明治三十四年十二月十一日 本多千代七十一才(后身)

二 本羅院義山日遊居士 文政六癸未二月十七日 本多平七郎老貞
本羅院妙耀日瑞大姉 文政七甲申七月七日

本多氏墓系 助進 助進
一 胤尾士 老依 老婢 文政六年七月十日
享保頃 空曆頃 安永三年七月廿二日



老恒 明治三年三月廿二日 前(うらむ) 一(はじめ)
妻 某 弘化二年七月十三日 養子 明治五年一月十六日生
所妻 亦 天保二年正月七日 津高郡首部 明治廿七年四月四日 二十三才
明治廿四年十二月十日 天保三年四月十七日生 北石詳

岡山藩士 牧 空右エ門の二女
明治二年 家臣 限二 郡代、持筒 役高五十俵とあり。大塚山にも墓石あり。
一 本多 依室 空左(ちん)とよき(と)ころ) 墓穴に棺を下すこと 俗名 助進
二 胤尾士 妙休大姉 妙兼大姉 明知元甲申年六月廿一日 本多氏
三 本多 助進 老婢 大姉 寛政三甲午歲七月廿二日終
寛心光院 妙射日意大姉 寛政十庚申歲八月八日終
本多 老婢 三男 老敬 為備 福山 家臣 川田 查 敬 長 養子 家督 而 改 查 長 孝 致 仕 福 益 文 政 六 癸
未 歲 考 老 婢 五 十 遠 忌 辰 孝 礎 石 碑 誌 碑 隱 云
四 聖照院 教林 日貞居士 文化六己巳年七月十一日 本多数馬 墓
智教院 妙貞 日澤大姉 安政元甲寅年九月二十二日
五 本多 院 義翁 日居居士 本多氏 大塚右二門 年号見えず
六 清頼 妙冬 信女 文政八年十一月九日 本多数馬娘 俗名 婦で

七 本有院 妙日善大姉 弘化二丙午歲七月十三日 本多 肇 老恒之妻 八老妻)

板野氏墓標

火智院 重光 日徳清居士 板野氏 諱 重光 明治廿七年六月廿一日 没 行年七十六 歲七月
智徳院 妙音 宮大姉 板野 謙三 重光 養女 俗名 房 明治十八年西六月廿一日 卒 享年十七
智徳院 妙鷹 日貞清大姉 明治三十四年四月廿三日 行年七十三才 (重光の妻)

× 板野謙三は吉備郡養村五十七番地板野平右エ門の子として、文政五年十月十五日に生れた。板野家は代々岡田藩主伊東氏の家臣に就いて謙三は幼時から父に就いて漢学を修め、後ち會敷村の富豪家大原杜平の養子となり、ひとり娘の久野と婚して一女直をもうけたが、商業の家憲と氣質を異にして大原家を去り妙法に吉備郡宮内村の旧家堀家宮内の四女鷹と結婚したが其継がなかつたので親族に當る岡山藩士岡山市南方の板野七兵衛の二男、謹吾を養子にレ岡山新道の岡山藩士堀 英生の姉を娶へて妻にした。偶明治元年の歳の瀬も過ぎた師走の廿八日の寒、晩、軒下に誰かか棄てたの女女の乳呑児を拾ひ揚げ名を房と名づけて養育するうち、明治七年に実子万龜が生れた。家庭に事情が起つて若夫婦と別居生活を送り謙三は二鬼を連れて明治十二年六月廿二日五十八歳の時、下撫川(いまの沖正夫の屋敷)に居を構へたが、同十八年房は十八歳で病死した。その翌年には万龜も十三歳で病死した(二女ともいまの肺結核であつたらしい)二女を失つた謙三は別に正業とておなく老夫はは大原家から月々いくらかの仕送りを受け辛うじて生計を支へ臨終は惠まぬまゝ、に十三歳の老齡で明治二十七年日清戦争の始まつた年に長逝したのである。屍を信成寺の墓地に埋葬した。妻は孤獨の身となり寂しい生活を送り同世四年六月廿三日七十二歳でこの世を去つたのである。

謙三が大原家に遺した一女直は生長して養嗣を迎へたのが、後ちに篤志家として知られ

ていす孝四郎である。孝四郎は天保四年十一月の生れで藤田家の出である。貧困にして學資の出来な、ものにはその費用を貸與して援助した。明治四十一年十二月にその志みも上げた人は六十人人に達したという。同年中の貸費額は當時の金で六千五百五十五円を算した。また町民のためには公債証書壹万円を醸出して倉敷奨学会を興して貧困學堂をして通學の資を得られるような方法を初めた人である。その子孫三郎は、いまの倉敷紡績の創設者にレク財界の大立物である。この人も父に流儀を承けて社会事業に偉大な貢獻をなして、ることは耳新レハ所である。つまり謙三はこの孫三郎の祖父にあたる筋柄である。

孫三郎は生前、謙三の祥月命日には必ず墓参のため信成寺に詣でいたので、桜井目の左の當時の権り、庭瀬両町の町會議員連中は此れと知り、その節度庭瀬駅まで襦袢袴の正装で出迎へて送り、存に久と並語をす了騒ぎあつたが、墓参毎に丁重にしてくれりのはありがたいことではあるが、何かお目的とする諸婿するかに見える態度があらわれたいので、さすべの孫三郎も嫌気がさして、寺への寄附とお墓参りには代参ですませるようになり、先れもいつの間にか絶えて時代もかわり、今では全く墓所も荒れ放題である。

板野氏畧系
 (墓石には七十六とあり)
 板野平右衛門一謙三 明治七年六月廿日
 妻 鷹 文政十五年八月十日
 明治廿四年六月廿日

謹吾には上房即上水田村坂本秀二の娘貞佐(安政四年五月四日生)という愛妾があつた。その子に千年(明治廿一年十二月廿日生)と全次郎(明治廿八年一月十三日生)の私生鬼があつた。

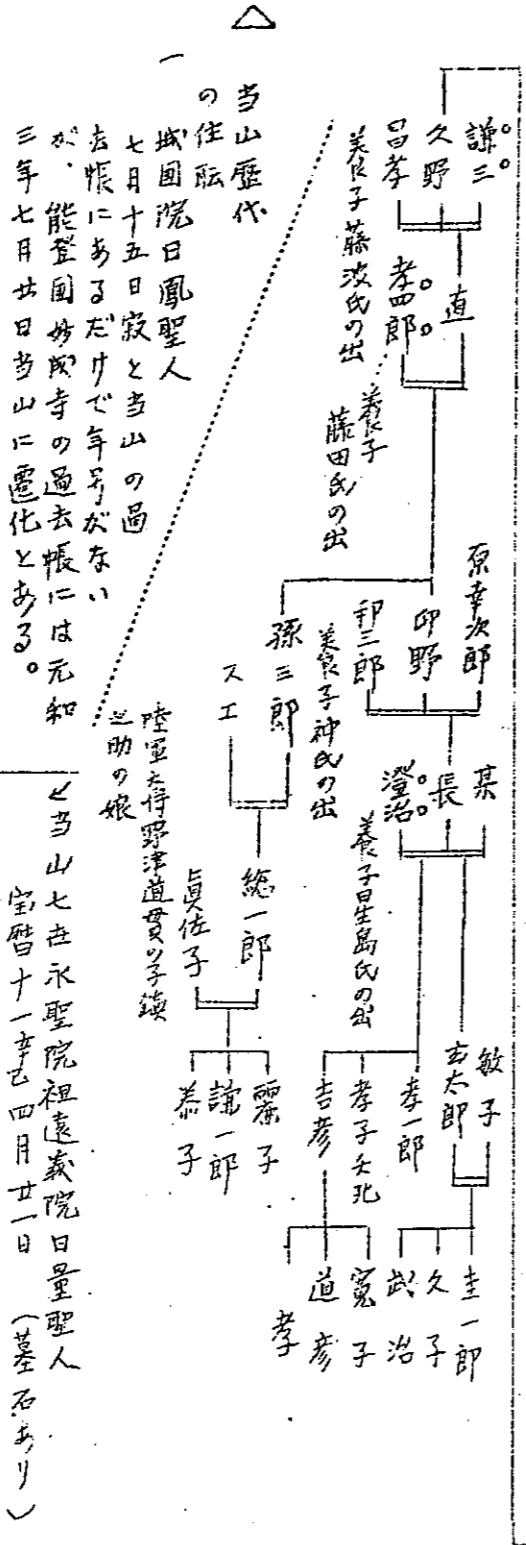
實陽郡宮内村坂本家の四女
 妻 鷹 文政十五年八月十日
 明治廿四年六月廿日

謹吾 安政二年三月廿日生
 岡山市南方板野七兵衛の妻
 妻 勇 岡山市新道場 英生之姉
 安政六年七月八日生 北不詳

房 章鬼 明治元年十二月七日生 同年十二月廿六日
 拾い揚げ養育す 同十八年六月廿七日 北七十八才

萬龜 明治七年五月七日生 同十九年十月廿日 北七十八才

△ 大原の畧系 (参考)
 大原忠右エ門忠則 — 其兵衛志之 — 其兵衛金基 — 其兵衛好道
 号は確堂 壯平清久 養子 原氏の出



当山十三世 幸堂遺立主
(正善院過去帳に玄文兩能故山より妙興寺に移り又備中庭殿信城寺を建立、但馬九日市勝妙寺にて遷化す六十九才とある)

一 不明

一十五世 即善院日長聖人 (墓石あり)
文政四辛丑歳二月廿五日

一十六世 唱導院日進聖人 十七世 日淨連
嘉永六癸卯歳五月廿九日

当山開基の城國院日鳳聖人は不斐院、妹尾の盛隆寺などを開基した高僧にして、その墓標は当山と盛隆寺の二ヶ所にある。いづれも豊島石造りの五輪塔であるが、これは聖人の供養塔である(幸三院の瓊夢照心)盛隆寺にある墓石の地石の文字をみるに、不斐院にある五輪塔の万治二年戸川又左衛門進令の筆蹟と同じである所から考へると、もと不斐院にあつたのではなからと考へられる(不斐院は最初戸川の菩提所であつたが、後ち盛隆寺にわたり藩主の墳墓も全許盛隆寺へ移してゐるので)

ゆる日学聖人が延慶藩主より正安時代の初期、この地の富豪であつた近藤 某の帰依によつて平野邑(現地)に移り再興したと傳へられてゐる。よつて日学聖人を当山第一世の祖として奉仰するものである。再興については縁起書、或は古大書などが散逸してゐるので考証しがたいが、明治廿七年頃の住職であつた谷口日憲和尚が書き残した文書によると、往時は教化盛んな法華宗の道場であつたが、中古藩主の政策に違反した原によつて忌避せられてなう次第に鐘時困難に陥り無住のことも続き、後寺同様の衰頹になつて諸僧等は荒れるがまゝに委せられたが、文化、文政の頃に日親和尚が非違の物態にあることを痛く歎き、淨戒を募つて大修繕を行ひ、漸く旧觀に復するようになった。明治廿一年に示寂した法嗣の日憲和尚の時代に空宇が朽壞したので、辛苦の結果、信徒の寄進を得て復興に努めたのである。同廿五年頃に次世の日淨法印の時に山陽鉄道が敷設されることになり、偶境故の一部が用地買収にかかり庭觀殿構内の敷地にあてられたので分断されて建築物は北側に、墓地は取の南側、田圃のなかに取残された形になつたのである。

往時は今の田圃道沿にある大覚大僧正の石碑が建てられてゐる細道から南へ一直線に入つていくのが正面の参道であるが、鉄道の線路に應じられて行詰りの道になつてしまつた。山陽鉄道に買収された当時、百五拾円の代價を貰つて同廿六年頃に移轉政策したのが現在の建物である。しかしその以後になつて再び維持が困難になつたので檀家を挙げて、いまの中正院に合併しその管理に属したのである。こうした理由のもとに中正院の歴代の和尚は遺産をわけて当山に隠居する例が聞かれたので、俗に隠居寺の稱があつた。文政以後は一時新寺といつたことがある。これは中正院の日親和尚が秘費を投じて大修繕を行つた際の餘材を用いて墓宇堂を本堂の傍に東面して建てたことから云はれた言葉であつたが、いまはその建物を取り壊されて跡形もない。

の際共に移送したものであり、(建碑は聖人の没後四十余年を経た二代戸川正安時代の寛文の初期と断定される。)

一十七世 清進院日淨聖人 姓は長瀬
明治十八年三月三十日 (墓石あり)

一 唱具院日進聖人
当山十八代 明治廿九年一月廿六日
在拜六十有二

一 意少日学法師
当山十八世 日進 從弟 明治廿六年五月廿六日
日七日 西花尾 施主 雄波 九平 若建 也

一 顯妙院日廣聖人
大正十四年五月廿五日 当山十九代 天壽五
十有二 当山中興 緋金 綱祖 十一 教堂
布教 並 大 匠 薩 護 結 社 再 興

一 顯妙院日復聖人 菅生村西坂 白神 是俊
昭和四年十月三日

一 瑞雲院日雅 (現住) 矢吹 景 彦
以上

○ 中正山了性寺

当山は平野の田圃道の南側にあり日蓮宗の寺院にして、もと古くから川入本村あたりにあつた創設不明の草庵を中正山の守興の祖とい

現在の建物は本堂、庫裏、客殿と前納た一棟の民家風にして一草庵と見すべきである。庭先に「元祖日蓮大菩薩」一妹尾産 貞成院宗善達之「五百五十遠忌」文政八乙酉天十月十三日しの文字が刻まれている供養塔と其の傍に「奉納 妙法蓮華經如来神力品第廿一」と刻んだ石碑がある。この貞成院は当山の住職日親和尚にして文政十二年四月四日に示寂してゐる。

西に隣接して妙見宮がある。当山の鎌寺にして参道は旧国道からで、鳥居には北辰妙見大菩薩の扁額がかかげられている。鳥居の西側に石の玉垣があつて支柱毎に丸の寄進者の銘が彫り込んである。右側から

奉寄進 岡田屋熊治郎
 宮内 三門屋 岩吉
 宮内 長崎屋 牛左衛門
 西花屋 妙見講中
 觀音堂 称吉
 東花屋 北屋
 岡山西大寺町藤屋茂四郎
 宮内 杉屋 彦四郎
 木屋 儀助
 大黒屋 龜吉
 梅屋 孫兵衛
 東平野村 年寄 太兵衛
 風呂屋口 辰之助
 老屋 藤三郎
 濱田屋 曾平
 今保本屋 甚藏
 (老屋の子孫はいま鎌倉宮に住す太田なたである。)

次田屋は岡山市上石井に住する野上氏である。
 奉寄進 在詔人
 糸屋 幸兵衛 寛治
 当村 忠八 兵吉 多八
 文藏
 大福屋 宇七
 浜田屋 三郎兵衛
 中屋 久三右衛門
 宮内山田屋 松蔵
 中田屋 吉五郎
 川入村庄屋 武右衛門
 今保屋 申之藏
 中田村 目代 金右衛門
 奉寄進 野崎太平治
 (中田村の庄屋で通葉といひ寛政三年十月三日に死してゐる。この玉垣の建設は明和安永の頃

かと思われぬ。)
 鳥居を潜ると西側に石灯笼がある。左側の銘に
 「当藩中 天保九年 家中講中」 また右側には
 「当村中 寄附 文政五年 辰三月十五日」とある。
 西側に三十番神、境守天王吉川明神 早龍天王の宮祠があつてその奥に妙見宮がある。内部の正面には「北辰殿 荒瀬天王」の板額が

懸げられてゐる。内陣の正面に安置されてゐる御本尊は高さ六十程位の黒漆塗の厨子に納められ、両開きの戸扉には金色で北斗七星をあらわしてゐる。御本尊は大石にれて高さ四十五程、二十五程角の巾でその三面に浮彫りの佛像がある。この尊像は昔川入の竹藪のなかから村民が掘出しここに祭祀したという。その年号は不明であるが漆像の彫刻面が浅刻で鮮明を欠き、且つ上部が崩れ下部が折損してゐる跡が認められる。これは長年月雨露に晒されてゐた露石佛であつたろうと推定される。川入の竹藪はソマ切り開かれ農家となつてゐる消防器具置場附近との説がある。御本尊の左脇に高さ四十五程の白木の厨子に荒瀬天王の本像が最も美しい雄姿で安置されてゐるが、作者其のほかのことは判らぬ。線路を隔てた南側の古寺の墓地に当山の住職の墓標がある。

- 一 了性山 関祖中正院日学上人 寛永十九年辰正月二日 迂化 明治三十五年二月佛祥日中正院且方中兼才九代日信謹造立也
- 一 微善院日盛 覚聖 元禄十二巳卯九月四日 (加蓋塔婆)
- 一 中正院日持比丘 享保十二丁未曆總四月廿八日
- 一 第七在 日淳比丘 年号なし (寛保元年十二月十九日は過去帳による)
- 一 八在 中正院日珠 覚聖 寛延四年未載 閏六月廿六日
- 一 当院九在中正院日明 覚位 (伽藍塔婆に示寂年月判読しがたし) (おわり)この項未完

食事と茶室
Meiji
 明治 庭頼駅前通
 皆様の憩いの店

吉備郵便局西隣
吉備ストア
 吉備局電田三四番
 に店に 物を買 御便利